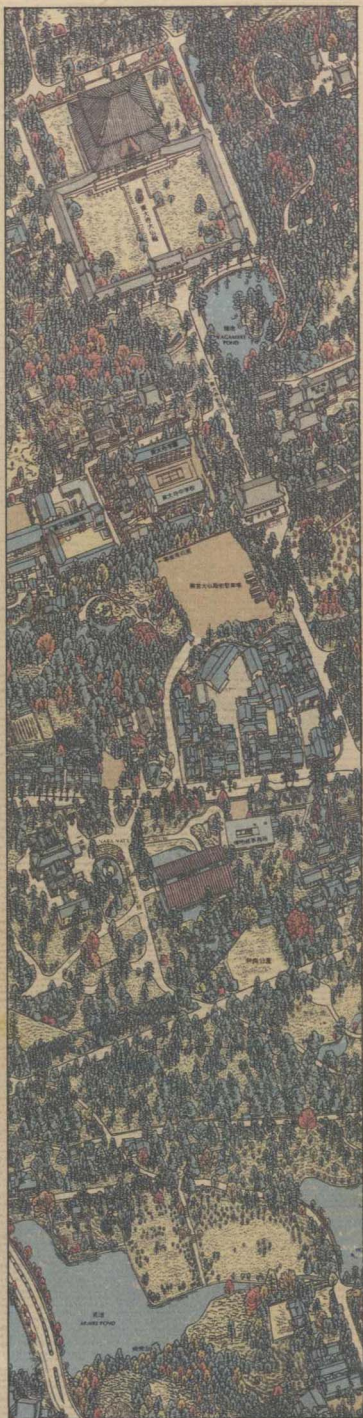


司馬遼太郎

街道をゆく二十四



街道をゆく

二十四

司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和五十九年十一月三十日 第一刷発行

街道をゆく 二十四

定価 一四〇〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 初山有恒

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 五十三二
電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇一七三〇

©司馬遼太郎 一九八四年

ISBN4 - 02 - 254964 - 5
Printed in Japan

街道をゆく

二十四

本書には「週刊朝日」昭和五十九年一月二十日号・連載第六百十九回から、同年七月二十日号・第六百四十四回までを収録。

目次

近江散歩

近江の人

寝物語の里

伊吹のもぐさ

彦根へ

i

23

39

57

金阿弥

73

御家中

91

浅井長政の記

107

塗料をぬった伊吹山

123

姉川の岸

139

近江衆

155

国友鍛冶

171

安土城趾と琵琶湖

189

ケケス

207

浜の真砂

225

奈良散歩

歌・絵・多武峯

243

二月堂界限

259

五重塔

277

阿修羅

295

雑華の飾り

311

光耀の仏

329

異国のひとびと

345

雑司町界限

361

修二会

377

東大寺椿

過去帳

兜率天

393

411

429

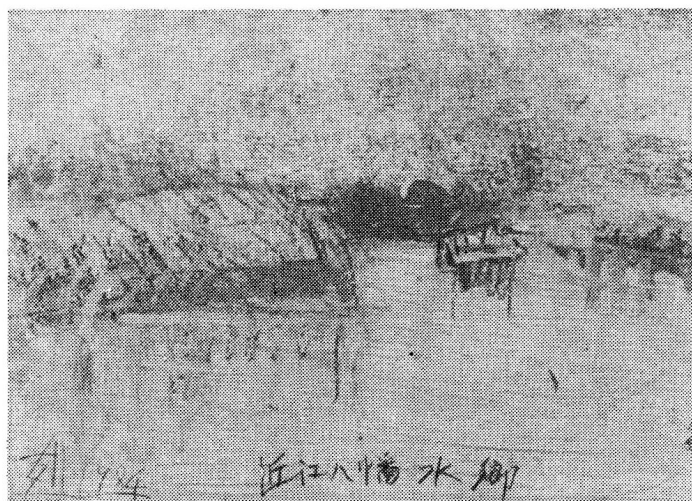
題字 棟方志功

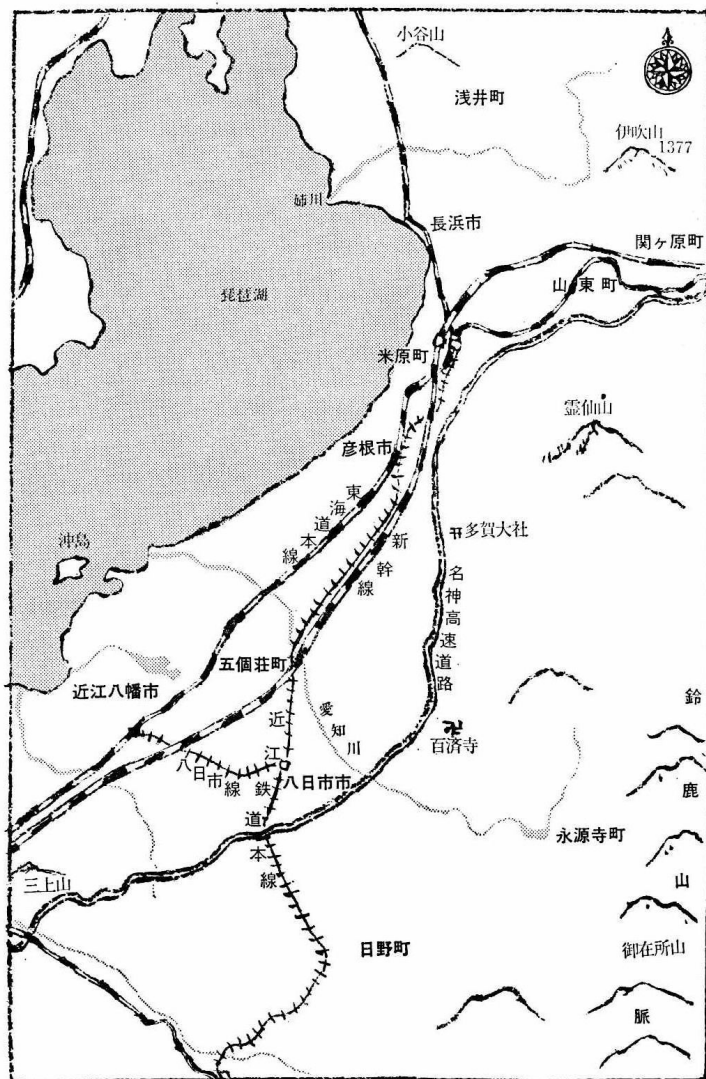
え 須田剋太

装幀 原弘

地図 熊谷博人

近江の人
近江散歩
一





このシリーズは、十四年前、近江からはじまった。

「もう一度、近江にゆきましよう」

という、須田画伯が、小首をかしげた。といって、口に出すほどの異論もないらしく、だまっている。

が、押しきってしまった。私はどうにも近江が好きである。

下り列車が関ヶ原盆地をすぎ、近江の野がひらけてくると、胸の中でシャボン玉が舞いあがってゆくようにうれしくなってしまう。

上り列車の場合もそうである。私は近江からみれば低い淀川河口の沖積平野のはしに住んでいる。大阪を出た列車が山城平野に入るだけですでに土地が隆い。やがて近江平野を過ぎてゆくと、豊穣で、たかだかとした台上をゆく気分がある。

こどものころ、図書館に古ぼけた本があつて、高天原は近江であるなどというようなことが書かれていた。いまからおもえばまことに蒙昧な内容の本だったが、その叙述のひとくだけたりだけはあざやかに記憶している。大阪湾の葦の原のそばで稲をうえていた古代人が、ふと思いたって淀川をさかのぼり、その水源地の近江までくると、土地がひろびろとして、しかも高燥な感じがする。この地こそ高天原である——といったような、いわばアホらしい内容なのだが、

しかし卑湿な地にいる者が、川をのぼってやがてたかだかとした野を見たという気分よきは、子供心にも共感できた。その快感が、近江にゆくといまもよみがえってくる。

近江路は春がいい。しかし車窓から見る湖東平野は、冬こそいい。下り列車が美濃に入り、関ヶ原にさしかかると、吹雪にたたかれる。しかし数分後に近江へのかすかな登り勾配にさしかかれば、吹雪が追って来なくなる。北近江に入れば、もう陽が射している。ただし、田の面は見わたすかぎり白い。どの田のあぜにも、榛の冬木がならんでいる。稲掛けにするために田のあぜにうえられた榛の木の風景は越後の春日山城のふもとの野でも見られるし、むかしは日本の各地でそうだったようにも思われるが、いまは近江特有の水田風景といっている。ときに榛の木々が、腰を雪にうずめたようにしてならんでいる。しかし列車が野洲の野に三角錐をなす三上山が見えるあたりまでくると、うそのように雪がなくなり、鎮守の森などのクスノキの葉がきらきらと陽に光っている。近江という一カ国のうちに北国と南国がある。

近江の村々の民家のたたずまいも、以前はよかった。いまはほとんど新建材にかわって失望させられるが、かつては、そのまま茶室になりそうな農家もあった。無名の村寺なども、微妙な屋根のスロープが他の地方とちがっていて、なにか決定的な美の規準をもっているようにおもわれた。このことは叡山という、日本の木造建築史の正統な建造物の一大密集地帯があった

ため、村大工の技倆や感覚の筋も他とはちがうのだと思わざるをえなかった。

さらには、近江人の物腰がいい。近江を語る場合、

「近江門徒」

という精神的な土壌をはずして論ずることはできない。門徒寺の数も多く、どの村も、真宗寺院特有の大屋根を聖堂のようにかこんで、家々の配置をきめている。この地では、むかしから五十戸ぐらいの門徒でりっぱな寺を維持してきたが、寺の作法と、講でのつきあい、さらに真宗の絶対他力の教義が、近江人のことばづかいや物腰を丁寧にしてきた。

日本語には、させて頂きます、というふしぎな語法がある。

この語法は上方から出た。^{かみかた}ちかごろは東京弁にも入りこんで、標準語を混乱(?)させている。「それでは帰らせて頂きます」「あすとりに来させて頂きます」「そういうわけで、御社に受験させて頂きました」「はい、おかげ様で、元気に暮らせて頂いております」。

この語法は、浄土真宗(真宗・門徒・本願寺)の教義上から出たもので、他宗には、思想としても、言いまわしとしても無い。真宗においては、すべて阿弥陀如来——他力——によって生かしていただいている。三度の食事も、阿弥陀如来のお蔭でおいしくいただき、家族もろとも息災に過ごさせていただき、ときにはお寺で本山からの説教師の説教を聞かせていただき、途中、用があつて帰らせていただき、夜は九時に寝かせていただく。この語法は、絶対他力を想

定してしか成立しない。それによって「お蔭」が成立し、「お蔭」という觀念があればこそ、「地下鉄で虎ノ門までゆかせて頂き、ました」などと言う。相手の錢で乗ったわけではない。自分の足と錢で地下鉄に乗ったのに、「頂きました」などというのは、他力への信仰が存在するためである。もっともいまは語法だけになっている。

かつての近江商人のおもしろさは、かれらが同時に近江門徒であったことである。京・大坂や江戸へ出て商いをする場合も、得意先の玄関先でつい門徒語法が出た。

「かしこまりました。それではあすの三時に届けさせて頂きます」

というふうに。この語法は、とくに昭和になってから東京に滲透したように思える。明治文学における東京での舞台の会話には、こういう語法は一例もなさそうである。

私事になるが、四、五年前までは、正月を京都ですごすのが癖になっていた。京都に宿をとって、近江に出かける。中毒のようだった。

十三年前の亥年の正月に、にわかに近江の蒲生郡が見たくなった。

地図を見ると、室町以来の都市である日野町がある。予備知識をもたずにその町に入ると、大正時代にまぎれこんだような家並やなみだった。

というより、京の中京区を移したようでもある。どの家も木口きぐちがよく、街路は閑寂ながら整

然としていて、しかもよい看板ではなく、品のいい町だった。

日野町は、織豊時代^{しよくほう}、もっとも知的で武略に富んだ大名として知られた蒲生賢秀・氏郷^{がもうかたひで うじさと}の古い城下町であった。蒲生氏は鎌倉時代からの地頭だったが、租税徴収だけをする地頭ではなく、歴代、よく百姓を介護した。とくに賢秀・氏郷は商人を保護し、このため氏郷が伊勢松坂に移封されてからも日野商人たちはあとを慕って松坂に移った。このことが、伊勢における商業をさかんにした。戦国期の近江においては武士から、商人になる者も多く、たとえば三井家を興した三井越後守高安なども、日野出身ではないが近江で興り、伊勢に移った。やがて松坂木綿をあつかったり酒造業を営み、江戸期、江戸に移って呉服商を営んで大をなした。越後守であったために、家号を三越と称したことは、よく知られている。

蒲生郡日野の町を歩いた日は晴れていたが、町をつつんでいる陽の光までがぎらつかず、空に一重^{ひとえ}の水の膜でも覆っているように光がしずかだった。

やがて家並のあいだに、大きな鳥居があった。くぐると、境内の結構や社殿がふしぎなほどに品がよかった。境内に林泉があり、ひとめぐりして鳥居を出た。鳥居の前から家並のゆきつくはてをながめてみると、むこうの屋根の上に淡く雪を刷いた岩山のいただきがわずかにのぞいていた。それが奇妙なほど神々しくおもえたのは、私の中にも古代人の感覚がねむっていたからに相違ない。もう一度神社に入りなおして社務所の若い神職にきくと、ああ綿向山^{わたむかやま}でござ

いますか、あのお山はこの綿向神社にとって神体山でございます、ということだった。神社は『延喜式』の古社で、建立はそれ以前であり、社殿がここに造営されたのは白鳳十三年（六八五）であるという。

京都のホテルに帰ると、古い友人が訪ねてくれていた。世の事に疲れきっていて、話し相手をほしがっている風情だった。二日目に、ふと、近江をお歩きになると、疲れがなおるかもしれないよ、といってみた。漠然と歩くのも何でしょうから、蒲生郡日野町の綿向神社に行ってみられるといいかもしれません、と言ひ、いかにも近江通であるかのように滋賀県地図のその場所に赤いマルをつけて渡したりした。

やがて、友人は近江からもどってきて、意外にも綿向神社の社務所で買ったという小さな絵馬をくれた。杉材の絵馬に、イノシシの焼印が捺されていた。

「ご存じなかったんですか」

友人は、いった。

「あのお宮では、十二年に一度、イノシシ年にだけこの絵馬を出すのだそうです。ことしはイノシシ年ですから」

私は干支に鈍感で、この正月がイノシシ年のはじまりであることも気づかなかった。まして綿向神社がイノシシ年の年男のための神社であることも知らなかった。この友人と私は同年